こえのするまち
広報
おーいしだ
大石田町
2020 7
No.769

季節の味をまるかじり！

「新しい生活様式」を
着実に実践しましょう ……P２～３
町ソフトバレーボール大会 ……P４
ニュース玉手箱 ……P５～７

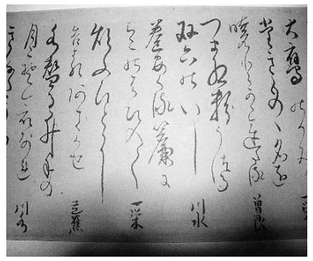
■表紙写真
学校給食でさくらんぼを堪能（７月３日）

広報おおいしだ 2020/7 No.769
◇編集・発行 大石田町総務課
〒999-4112 山形県北村山郡大石田町緑町１番地 ☎0237-35-2111 FAX 0237-35-2118
◇印刷 (有)印刷 文化堂

別冊

おおいしだものがたり
～資料館資料編～

■つま紅粉うつる双六の石『さみだれ歌仙』より
日本遺産「山寺と紅花」によせて



たきものの名を
暁とかこちたる　曽良
つま紅粉うつる
双六のいし　川水
巻きあぐる簾に
ちごの這入て　一栄
煩うひとに
告るあきかぜ　芭蕉

元禄二年（1989）五月二十八日（新暦７／14）芭蕉と曽良は大石田の高野一栄宅に着きました。翌二十九日から一栄・川水を加えて、『さみだれ歌仙』を仕上げました。芭蕉自ら浄書して「これを参考にしなさい」とこの地に残していったこの歌仙について、本文では「この旅の風流ここに至れり」と満足している様子がうかがえます。

奥の細道の旅で唯一現存するといわれるこの『さみだれ歌仙』を、芭蕉が訪れたこの時期に見てもらいたいと思っています。今年はコロナの関係で時期は少しずれますが、只今資料館で開催中の「黒江太郎コレクション展」期間中７月25日～８月２日、９月５日～13日の２回に分けて真筆を展示します。

今回は『さみだれ歌仙』三十六句のうち、紅花に係る部分について取り上げてみます。

「歌仙」には「式目」と言われる約束事があります。例えば一七句目と三五句目には「花の句」を主たる客人やその家の主人など、高位の者が詠むことになっていて、下位の者に譲ることを「花を持たせる」などとも言います。また、歌仙中一、二か所には「恋の句」を入れるのが一般的です。この歌仙内での恋の句の一つが、今回取り上げる「たきものの名を暁とかこちたる（曽良）」です。それに続けて川水が「つま紅粉（べに）うつる双六の石」と詠みました。曽良の句は「香を焚いて恋人を待っているのにまだ来ない、香の名が『暁』というのも『暁の別れ』を暗示しているようで何となく不安だわ」といったところでしょうか。そこから川水の句では、その女性が手慰みに双六で遊んでいる場面に変化します。化粧のときに爪に付いた紅が、双六の石にも移っている様子です。紅は紅板などから薬指でぬぐい取って使用するもので、いかにも女性らしい仕草の艶やかな句です。

芭蕉が大石田を訪れた頃には五百駄前後の紅餅が最上川を下って上方（京・大坂）に運ばれました。上方ではそれを染料や化粧用の紅に加工しました。紅餅一駄120kgに生花1,200kgが必要だったようです。価格は平均四十七両という高価なもので、舟で輸送する場合最も心配されたのは破船でした。碁点・三ヶ瀬・隼の三難所は特に危険なことから、大石田までは羽州街道を陸送するというのが普通でした。その駄賃は街道筋の楯岡や天童などにとって重要な収入源となったそうです。大石田から積み込むものは、米の他に紅花、青苧（あおそ）、煙草などが主でした。

もう一度歌仙にもどってみます。川水に続く一栄と芭蕉の句も秀逸で、特に芭蕉の句は場面と季節に変化を持たせ「さあ進みましょう」と指導してくれているようです。『さみだれ歌仙』の全句をここでご紹介することはできませんので、資料館で本物をご覧になりながら芭蕉一同の俳諧の気分を味わってみてはいかがでしょうか。

大石田町立歴史民俗資料館館長　佐藤里美

黒江太郎コレクション展は９月13日（日）まで

楽がき帳

新型コロナウイルス感染症の再度の拡大や、熊本県を中心に九州や中部地方などに甚大な被害をもたらした令和２年７月豪雨など暗いニュースばかりのこの頃ですが、季節は夏、特産品のスイカも収穫時期となり、良いニュースが増えることを願うばかりです。

さて、みんなのスポーツに掲載させていただきましたが、７月12日に町ソフトバレーボール大会が開催され、取材のためにお邪魔しました。レディースの部の初戦は昨年準優勝の「CBH」と「チームらら」の試合。実際にその場で見ていると、攻撃に守備にと選手の皆さんが軽快に動き回り、躍動感のある素晴らしい試合でした。しかし、なかなか写真でその躍動感を表現できずに、スポーツを写真で伝える難しさを感じた日でした。（松）

※この人数は外国人も含めたものです。

町の人口	令和２年７月１日現在	
世帯数	2,333戸	（±０）
総人口	6,812人	（－15）
男	3,345人	（－７）
女	3,467人	（－８）
（６月中の異動）		
出生 ０人	転入 ８人	
死亡 ７人	転出 16人	